

## せん ど けい 織度計

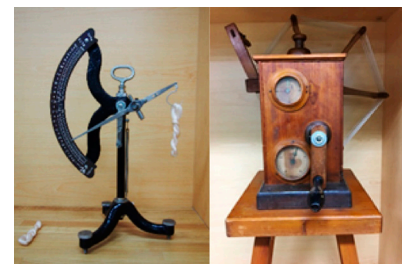
### せん ど けい 織度計って何？

絹（シルク）の着物を見たことがありますか。あのなめらかで美しい絹は、<sup>かいこ</sup>蚕 という虫が作る<sup>きいと</sup>生糸から作られています。

生糸には太いものも細いものもあります。その太さを正確に測る機械が「織度計」です。

織度計は 3 つの道具で成り立っています。

- 検尺器：一定の長さの糸を巻き取る道具
- 検位衡：その糸の重さを測るはかり
- 織度分銅：検査に使う重り



けんいこう  
検位衡

（東京都計量検定所蔵）

使い方はこうです。まず、検尺器で決まった長さの糸を巻き取ります。次に、その糸を<sup>けんいこう</sup>検位衡にかけて重さを測ります。すると、糸の太さが分かる仕組みです。

糸の太さの単位は「デニール (D)」といいます。450メートルの糸の重さが50ミリグラム (0.05グラム) のときの太さが、1デニールです。とても細かい単位ですね！

### 検定制度の始まり

大正9年（1920年）、法律が改正されて、大正10年（1921年）1月1日から<sup>せん ど けい</sup>織度計の検査が始まりました。当時は「<sup>きいとせん ど</sup>生糸織度検定器」という名前でした。

このとき、<sup>せん ど けい</sup>織度計のほかにも、<sup>うき</sup>気圧計、<sup>ばかり</sup>浮秤、温度計、牛乳の脂肪分を測る<sup>にゅう し けい</sup>乳脂計なども、同時に検査の対象になりました。



長さ計（ものさし）

タクシーメーター

皮革面積計

目盛付タンク

質量計（はかり）

圧力計と血圧計

化学用体積計

燃料油メーター（自動車等給油メーター）

ます

温度計と体温計

ガスメーター

液化石油ガスメーター

織度計

浮ひよう（密度・比重・濃度）

水道メーター

環境計量器

織<sup>せん</sup>度<sup>ど</sup>計<sup>けい</sup>の検査は、国が行うことになりました。東京は中央<sup>どりょうこう</sup>度量衡  
検定所があった場所だったので、都では検査を行いませんでした。

検査の数を見ると、昭和6年（1931年）までは年間5,000個から10,000個もありました。でも、その後は2,000個から3,000個に減り、昭和18年（1943年）以降は400個から500個になってしまいました。この頃、東京で織<sup>せん</sup>度<sup>ど</sup>計<sup>けい</sup>を作っている会社は、わずか3社だけでした。

## 計量法の時代へ

昭和26年（1951年）6月7日、新しい計量法ができました。昭和27年（1952年）3月1日から、織<sup>せん</sup>度<sup>ど</sup>計<sup>けい</sup>の検査は都道府県が行うことになりました。このとき、名前も「生<sup>き</sup>糸<sup>いと</sup>織<sup>せん</sup>度<sup>ど</sup>検<sup>けん</sup>定<sup>てい</sup>器<sup>き</sup>」から「織<sup>せん</sup>度<sup>ど</sup>計<sup>けい</sup>」に変わりました。

検査の基準は、度<sup>ど</sup>量<sup>りょう</sup>衡<sup>こう</sup>法<sup>ぽう</sup>の時代とほぼ同じでした。検尺器<sup>いどわく</sup>の系<sup>けい</sup>枠<sup>わく</sup>は、回転のずれが2分の1回転以内、周の長さ1.125メートルに対して誤差<sup>ごさ</sup>が4ミリメートル以内でなければ合格できませんでした。

織<sup>せん</sup>度<sup>ど</sup>分<sup>ぶん</sup>銅<sup>どう</sup>は、0.01デニールから200デニールまで、15種類ありました。形も少し変わりました。0.02デニールの分銅<sup>ぶんどう</sup>は、四角形からひし形に、0.1デニールの分銅<sup>ぶんどう</sup>は、六角形から四角形になりました。

## 時代とともに減っていく

織<sup>せん</sup>度<sup>ど</sup>計<sup>けい</sup>の検査は、質量計<sup>しつりょうけい</sup>を担当する係が行いました。

検査を受ける織<sup>せん</sup>度<sup>ど</sup>計<sup>けい</sup>の数は、だんだん減っていききました。検査が始



カイコのまゆがオスカメスを  
判別するはかり  
(東京都計量検定所蔵)

長さ計（ものさし）

タクシーメーター

皮革面積計

目盛付タンク

質量計（はかり）

圧力計と血圧計

化学用体積計

燃料油メーター（自動車等給油メーター）

ます

温度計と体温計

ガスメーター

液化石油ガスメーター

織度計

浮ひょう（密度・比重・濃度）

水道メーター

環境計量器

まった頃は年間400個から500個ありましたが、昭和34年(1959年)には78個、昭和35年(1960年)には52個になってしまいました。

昭和41年(1966年)、計量法が改正されました。昭和42年(1967年)6月30日から新しいルールが始まり、<sup>せん ど ぶんどう</sup>織度分銅の種類は10、20、50、100、200デニールの5種類だけになりました。5デニール以下の小さな<sup>ぶんどう</sup>分銅は、検査の対象から外れました。

昭和42年(1967年)の時点でも、東京で<sup>せん ど けい</sup>織度計を作っている会社は相変わらず3社だけで、検査を受けたのはわずか14個でした。昭和45年(1970年)には31個に増えましたが、その後また減っていきました。

### なぜ減ったのか？

<sup>せん ど けい</sup>織度計が減っていった理由は、いくつかあります。

一つは、<sup>きいと</sup>生糸だけでなく、いろいろな種類の<sup>せん い</sup>繊維(ナイロンやポリエステルなど)が使われるようになったことです。<sup>せん い</sup>化学繊維が<sup>ふきゅう</sup>普及して、<sup>きいと</sup>生糸を測る機会が少なくなりました。

また、測定の技術も進歩して、もっと新しい方法で糸の太さを測れるようになったことも理由の一つでしょう。

こうして、<sup>せん ど けい</sup>織度計の検査は時代とともに減り続け、ほとんど見られなくなっていきました。でも、かつて日本の重要な産業だった<sup>きいと</sup>生糸の取引を支えた、大切な計量器だったのです。



長さ計 (ものさし)

タクシーメーター

皮革面積計

目盛付タンク

質量計 (はかり)

圧力計と血圧計

化学用体積計

燃料油メーター(自動車等給油メーター)

ます

温度計と体温計

ガスメーター

液化石油ガスメーター

織度計

浮ひよう(密度・比重・濃度)

水道メーター

環境計量器